高校生の「選択」

小川原正道

(慶應義塾大学法学部教授)

かつて小泉信三は、学生に対して、批判力をもって良書を読むこと、古典的名著を読むことを勧めた。今回五つのテーマを与えられた高校生は、どれだけ参考になる良書や古典に接することができたろうか。インターネットで簡単に情報が集められる今日だからこそ、コンテストがよき機会となってくれたらと思う。

応募作には力作が集まった。受賞作の石橋論文は、バレイリーナとオタクを比較しながら、その熱中構造をエンジンに例えて分析し、最終ゴール、ゴールへの努力、燃料、に分割してバレイリーナとオタクの共通点を探った。そして、この熱中エンジンを稼働させることにより、生産性、競争力の高い日本につながるという。視点がオリジナリティーにあふれてお

り、最も高い評価を集めた。

次席の米山論文。ある映画に現れる「Choose」という単語に衝撃を受けたという著者は、SNSに「くだらない」内容を投稿する理由を「承認欲求」にあるとして、マズローの欲求五段階説に言及し、その頂点にある「自己実現」を目指して、そのために必要な教養を身につける必要を説く。未来を「選択」する強い意志を感じた。

佳作三編は、いずれも民主主義の限界や問題点を問うたものであった。まずは福任論文。小学校時代をタイで過ごした著者は、帰国後、学校生活で戸惑う。会議の席では何も意見を言わないのに、教室を出ると不平を爆発させ、決定事項に従わない生徒たち。学校民主主義の現実に失望した著者は、ポピュリズムが台頭する世界に目を向け、どんな状況でも動されず、公正な目で判断し、自己決定ができるよう努力していきたいという。

小名木論文は、若者の政治への関心を高めるための方策として、スウェーデンの事例を引き、地方分権を進め、自分たちの地域のことは自分たちで決めるようにし、国政選挙につなげていくことを主

張する。その触媒として、模擬選挙や地方政治におけるポウトイットの活用が有効であるとする。そして、民主主義の濫用や民衆の判断を越えた方向に進ませないため、政治に対する責任感を持つべきであるという。

最後に、長谷論文。民主主義が限界にあると考える著者は、民主主義を理解していない人が増え、宗教と民主主義とが対立している現状、ヒトラーなどの独裁者が生み出されてきた歴史から、マスコミが信用できない日本では民主主義は限界だと述べる。その上で、若者はマスコミとは別手段で情報を入手しており、新しいメディアも生まれてくると展望する。応募作品はいずれも、高校生がテーマを選び、参考文献を選び、小論文を構成し、生み出されたものである。十八歳選挙権によって身近になった民主主義。もはや生活の一部になったSNS、マニアと同義化してきたオタク、など、高校生にとっては取っつきやすいテーマが多かったかもしれない。その中でいかに論理的に自説を主張し、オリジナリティーを発揮できるか。今年のコンテストでは、レベルの高い競争が見られた。

新たな視点に向けて

おきのあんな
萩野安奈

(慶應義塾大学大学院文学研究科教授)

オタク、SNS社会、そして民主主義。今回の課題は、われわれの日常を新たな視点から切り取ることを要請するものが多かった。

小論文である以上、主題の全肯定や全否定は望ましくない。課題が「オタク」ならば、日本の文化の一形態として、世界への発信力とその経済効果を認める、という方向に論は進む。書いた本人は新しい切り口のつもりでも、審査員は「またか」とため息をつくことになる。

その場合、論文の骨格にいかなる肉付けがなされるかが決め手となる。いい例が今回の小泉信三賞である。著者の石橋さんは三歳から始めたバレエを、現在も生活の中心に据えている。友人から「バ

レエオタク」と呼ばれ、「心外」と感じることが出発点になっている。

熱中の対象を持つ生活、という点でバレリーナとオタクは「同志」である。両者の熱中の「仕組み」をエンジンに例えたことが、この小論文の独自性となった。

いかなる燃料をどう燃焼させて車を前進させるのか。「他者からの評価」が最終目的となるのは同じだが、他者との接触がリアルかネットかでエンジンに相違が生まれる。バレリーナは観客の感動に報われ、オタクは「いいね」数に一喜一憂する、というわけだ。

興味深いのは、芸術家肌の著者が、エンジンという一見理系の発想を基にしながら、経済の用語や観点を積極的に用いていることだ。この作品のおかげで私は「ベルソナマーカーテイキング」と「コアコンピテンシー」という言葉を学んだ。「熱中することは資本なのだ」という結論に達するバレリーナは、文武ならぬ文経両道といえよう。

石橋さんが「他者からの評価」を重視したように、次席の米山君もまたSNSの利用者の「承認欲求」に注目する。自身がツイッターでミュージックビデオを

紹介し、多数の「いいね」と「リツイート」を獲得したことがある。喜ぶべきところだが、むしろ罪悪感を感じた、という点に著者の良心を感じる。評価されるべきは紹介した自分ではなく、ビデオの製作陣であり、「僕は他人の評価を奪った泥棒になってしまった」というのだ。この一文を原点とする限り、著者の人生の選択に間違いはないはずだ。

民主主義を選択した人が思いの外多かつたのは、嬉しい驚きだった。読み進むにつれ、驚きは「またか」に変化していった。民主主義の失敗例として挙げられるのは、一位がヒトラーとワイマール憲法、二位がアテナイのデマゴークだった。

佳作の福住君と小名木君は、受賞作と同様に肉付けが巧かった。福住君は海外体験で自己表現の大切さを学んだことが、日本の日常を相対化する契機となった。小名木君は、スウェーデンにおける参加型の民主主義を例に取って説得力があった。予想外の展開を見せたのは長谷君で、宗教と民族の多様性が対立を生む二十一世紀に民主主義は「不可能」とし、「新たな政治理論」の必要性を説く。若者らしい蛮勇に好感が持てた。

そろろう元気のいい発想

権丈善一けんじょうよしかず

(慶應義塾大学商学部教授)

今回特徴的であったのは、三つの佳作が、「民主主義とは何か」というひとつのテーマから選ばれたことである。

佳作から講評していけば、審査委員がこのテーマを選んだのは、やはり昨今の民主主義の動きをみてのことであった。そのあたりを、佳作受賞者の三人は受け止めてくれていた。

小名木礼仁さんは、民主主義を多数決であると考え、「乱用されることや、不適切な指導者を選んでしまう」ことを、歴史上の例をあげながら論じていく。「原因は簡単に利用、扇動され熱狂する民衆にある」と喝破して、「教育システムを変えることが必要となる。…コンピュータが発達した今…むしろコンピュータにできない情報処理や」考える力を養う

べきだ。…デマゴークにダマされないよ
うな思考力を育てるべき」と結んでいく。
長谷海王さんは、日本の「メディアの活動は海外のそれと大きく外れている」と指摘し、マスコミが信用できない日本
で民主主義は限界という興味深い観点か
ら、「このことは時間が経てば解決する。
…時代が進みマスコミの考えを鵜呑みに
する世代が時代とともに去つていった後
には、既存のマスコミの衰退と新しいメ
ディア形態の誕生、正当な民主的判断が
訪れると予測する」。

福住旺穂さんは、小学生の六年間をタ
イ王国で過ごし、そこで出会った民主主
義と日本のそれが根本的に異なることに
驚く。日本で問題と指摘することは、我々
日本人からみれば、確かにそうかもと領
けるところが多々あつておもしろい。

次席に選ばれた米山然さんは、映画『ト
レインスポッティング』の中で、キーワ
ード choose に着目する。一九九六年の
T1では、chooseの対象は、当時の誰も
が憧れ、手に入れた魅力的なものだっ
たが、二〇一七年のT2では、「Facebook
や Twitter、Instagram を選び、『誰か
見て』と朝食の身を全世界に公開しろ」

と、暗い台詞に変わる。日々の生活を選
択の連続であるとして、自分がSNSを
選択する意味を考えつつも、「SNSだ
けで教養を得ることは不可能」と考え、
SNS社会の中で「一つ一つの意見が大
きな可能性を持つ今こそ、教養の重要性
が増している」と説き、「これからもS
NS社会で生きていく。その中で自己実
現を模索する。「教養」はそんな僕を支
える柱となる」と、センスある流れで難
しいテーマに答えていく。

小泉信三賞の石橋真里奈さんは、三歳
の時からバレエに熱中。そしてオタクⅡ
熱中Ⅱ人を何かに駆り立てるエンジンと
捉えて、エンジンの構造を考えていく。
考察を経て熱中エンジンの設計図を示し
た上で、日本の若者が持つ熱中エンジン
は日本が誇る社会資本だと評価し、「若
者のパワーを結集することで生産性を向
上させ、競争力の高い日本を作ることが
できるだろう」と、誠に明るい日本の未
来を描いている。「オタク」という一見
ネクラなテーマから、これだけ明るい見
通しを与えてくれる結論に導いてくれた
論文の構成力は、小泉信三賞に値すると、
審査員の皆が思ったことであろう。

審査を終えて

須田伸一すだ しんいち

(慶應義塾大学経済学部教授)

今回もこの小論文コンテストに多数の応募をいただいたことに対し、審査員の一人として感謝申し上げます。応募者は五つの課題の中から一つ選ばなくてはならなかったが、今回は三人に一人が「オタク」という課題を選んだ。多くの高校生にとつて「オタク」がいちばん身近で書きやすい課題だったのだろう。そのため、私自身も応募作品からオタクについて多くのことを学ぶことができた。なお、最終審査進出者の選んだ課題でみると、「民主主義とは何か」がいちばん多い。

さて、小泉信三賞に選ばれたのは、石橋真里奈さんの作品である。これは着想の獨創性、論文の構成、文章の読みやすさのどれをとっても優れており、多くの審査員が高い評価を付けた。バレーナ

とオタクを比較するという意表を突くテーマにもかかわらず、論旨が自然に展開していき、最後は日本社会への提言で終わる。高校生らしい素直な文章の背後に、緻密な論理が隠れている。

次席の米山然君の作品は、映画に登場する台詞を手掛かりに、自身のSNSの使い方について考察を深めるという内容になっている。文体がエッセイ風で小論文らしくないところが気になったが、構成がしっかりしている点に好感もつた。マズローの欲求五段階説を用いての分析も面白い。欲を言えば、教養についての分析をもっと掘り下げてもらいたかった。

佳作の三点は、図らずも「民主主義とは何か」という課題を扱った作品から選ばれた。その中で個人的には福住旺穂君の作品を一番高く評価した。自分の経験に基づきながら、民主主義がどうあるべきかを正面から真剣に考察しているからである。ただし、前半の体験談の部分が少し冗長に感じた。

残りの二作品についても簡単に触れておこう。長谷海王君の作品は今の民主主義が限界にきているという主張をさまざま

まな視点から論じ、現代社会に対する鋭い批判を含んでいるが、一方的な見地からの考察が多いように思った。もう少し丁寧に議論を進める必要があるだろう。

また、小名木礼仁君の作品は、「民主主義は多数決」という規定から始まって、投票率を上げる方策、歴史的事例、教育システム変革の必要性和話が飛び、全体としてのまとまりを欠いているように感じた。論点をもっと絞って書けば、優れた小論文になったであろう。

最後に将来の応募者へのアドバイスを述べておく。小論文の内容を決める際には、まずは自分の頭で論文の方向性をよく考えてもらいたい。何も考えずに課題をインターネット上で検索すると、手に負えないほどたくさん情報を短時間で手に入れることができってしまうが、結果として独自性のない、情報の羅列だけからなる小論文に仕上がる可能性が大きいからである。ウェブ上で細かい事実を確認するのは、ある程度論旨が定まってからでも遅くない。そして最後に、完成した文章を何度も読み返して推敲すること、論文の完成度が格段に改善されることになる。

書きたい事をまじめに

はやかわ ひろし
早川 浩

(株式会社早川書房代表取締役)
社長・慶應義塾評議員

本賞の審査委員を務めて三年がたつ。応募作で気になるのは、題材や資料を咀嚼しきれない論文が間々有ること。高校生は空いている引出しがたくさんあるから、自由に知識を出し入れ出来、海綿のようにそれを体全体に浸み込ませる。だからこそ整理整頓してから書くことが肝腎。書く内容がきちんと自分のものになっているか否かはこの手のものを数多く読み込んでいる者にはすぐにわかるものだ。

小泉信三賞を受賞した石橋さんの「バレーナとオタクの『熱中エンジン』」には、自らの体験に基づいた独自性がある。題名がすべてを物語っているように

バレーナとオタクを突き動かす原動力とは何かを、エンジンになぞらえて解明していく過程が面白い。ひとつのことに熱中する若者らしい清々しさを感じながら読んだ。論の運びにやや強引などころはあるが、審査委員の圧倒的な支持を得ての受賞となった。

次席の米山さんの「未来のための『選択』」は、映画『トレインスポッティング』の台詞を契機に、日常何気なく使っているSNSの功罪を検証し、使いこなすためには新時代の教養が必要だと結ぶ。文章はこなれており読み易いが、論文としてはやや軽量級の印象を持った。

佳作入選の福住さんの「私の中の民主主義―その実践と課題について思うこと―」は、民主主義の問題点を婦国子女としての経験から書き起こし、ポピュリズムを論の中心に据えているのは良いし、参考文献も上手く使っている。惜しむらくは結論が平凡なこと。前半の勢いで独自の結論を導き出せばさらに良かった。

小名木さんの「みんなで守る民主主義」は、各国の事例や歴史を紹介しながら民主主義とは何かを考察する。多くの資料

や情報にあたって丹念に書き込んでいる点には感心するが、筆者なりの視点が欲しかった。

長谷谷さんの「民主主義の衰退」はしっかりとした論文だ。その主張には賛成しかねる部分もあるが、民主主義がその限界を露呈する、現代の国際情勢を冷徹に分析している。結論で民主主義に代わる新たな政治理論が提示できれば一層良くなっただろう。

他には、歌謡曲を切り口に東京の変遷を辿った、佐々木さんの「歌謡曲・J・POPから見る『東京観』の変遷」、モテスキューの『法の精神』に照らして現代日本を検証した、平田さんの「日本における〈真の民主主義〉」についての考察」が印象に残った。

小社と深く長いかわりがあった、現代の近松門左衛門と謳われる劇作家、小説家の故・井上ひさしがこんなことを言っていた。

「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかしく、ふかいことをゆかいに、ゆかいなことをまじめに」

この考え方は、特に論文を書く上にはとても大切な姿勢であると考ええる。